

本県に西洋リンゴが初めて入ったのは、1875（明治8）年のこと。それ以前は和リンゴしかなかった。和リンゴは中国が原産で、鎌倉時代には既にあったようだが、詳しいことは分からな

青森市内でも売られていることを紹介している。また、弘前市のりんご公園で公開している和リンゴは1個50gと小ぶりですが、食味は劣るものの、当時の人はおいしく感じられただろうと記述して

5万トン時代へ

青森リンゴ輸出

23

い。

青森市在住の民間リンゴ研究家・杉山芬さんと

雍さん夫婦は著書「青森県のりんご」で、和リンゴは、現在もお盆の供え物として「リンク」「りんぎん」などと表示して

いる。

和リンゴと明治以降に主にアメリカから導入された西洋リンゴを区別するために和リンゴを「林檎（りんご）」、西洋リンゴを「苹果（へいか）」と表現していた時期もある。

明治期に7品種が定着

った。

リンゴのルーツは、中央アジアのコーカサス地方や中国天山山脈の新疆

ゴとして伝わった。西に渡ったリンゴはヨーロッパで改良が重ねられ、さらに降雨が多いなど比較

その品種とは、国光、紅玉、柳玉、祝、倭錦、紅魁、紅絞である。明治末期には国光と紅玉で78%を占めていたとのこと。紅魁は現在ほとんど栽培されていないが、本県で最初に結実した西洋リンゴだ。



紅魁 Red Astrachan
青森県で最初に収穫できた西洋りんご品種



ワリンゴ
学名 Malus asiatica Nakai

小さい疣状の膨らみ

日本に和リンゴと西洋リンゴ（杉山芬・雍著「青森県のりんご」から）

は、野生種のまま栽培され、それが、

最終的に日本に西洋リンゴとして渡ってきたとのことだ。

日本に渡った西洋リンゴは、いずれも明治初期に北海道開拓使と内務省勸業寮で明治維新後の産業振興のために普及が進められた。当時、輸入されたリンゴの品種は270もあったものの、定着した品種はわずか、明治の7大品種と紹介され

（県りんご輸出協会事務局長 深澤守）